

中高年層の社会的活動の特徴と課題（第1報）

—神奈川県における「ボランティア等活動事例の調査」を通して—

○大泉伊奈美* 鈴木敏子** 趙偉偉*³ 斉藤ゆか*³(*飯田女短大 **横浜国立大 *³横浜国立大・院)

目的 高齢社会を迎え、高齢期における病気や介護に対して不安感が抱かれるとともに、高年期になっても健康で主体的に活動したいという意識がもたれるようになってきている。また、1995年に成立した「高齢社会対策基本法」およびそれに基づく「高齢社会対策大綱」（1996年7月閣議決定）では、社会的活動に関する対策が一つの柱にされており、「高齢者のための国連原則」には「参加 (participation)」があげられている。そこで、中高年層の社会的活動状況の特徴を明らかにし、今後の課題を探ることを目的とする。

方法 (財)かながわともしび財団が行った「ボランティア等活動事例の調査」を分析する。調査は神奈川県でボランティア等の社会的活動をしている個人 326人を対象にして、1997年12月～1998年1月に郵送法で実施されたものであり、回収数は150、その内有効分析数は148であった。主な調査内容は、活動へ至った経緯、活動の内容・状況、活動の財源、活動の結果、公共機関・団体・行政に対する要望である。

結果 回答者は、男性87人、女性59人である。年齢分布は、男性の方が高齢層に傾いており、平均年齢は男性68.0歳、女性64.3歳となる。1990年代に開始された活動が過半数を占めている。活動内容は、「高齢者・障害者等の手助けなどの福祉活動」をあげた人が6割強と「福祉活動」型がもっとも多い点は男女に共通しているが、男性は「趣味・学習・教養」型、女性は「地域活動」型、「健康づくり活動」型という特徴がみられる。女性の方が、平日の午前や午後に定期的に、高い頻度で活動を行っている。行政などに対する要望は、施設の利用の仕方の改善や整備などに関してあげるものが多い。